

# 美空ひばりの普及と映画の関係 (1952. 7 - 1955. 6)

—— 「松竹優勢時代後期」 ——

斎藤 完

The Relation between Popularization of Hibari Misora and her Movies  
(1952. 7 - 1955. 6)

SAITO Mitsuru

(Received September 30, 2011)

## 1. はじめに

美空ひばりを世に広めた主な媒体は映画である——この見解が、少なくとも活動初期（1949年下半期～52年上半期）に関しては妥当であることを拙稿「美空ひばりの普及と初期映画の関係」（斎藤 2010a）において明らかにした。また、それに続く「初期美空映画の特徴について」（斎藤 2010b）では、映画が彼女を受容する際の枠組みを提供していた可能性を示した。

本稿は続編として、その後の美空ひばりの普及と映画の関係を探るものである。

まず、本稿が対象とする時期を決定し、当時の美空を概観したうえで、彼女を普及させる媒体としての映画の貢献度とその内実（歌・演技の割合と美空に対する評価）に言及したい。

## 2. 本研究の対象時期

美空ひばりが出演した映画は165本。それを年別に示すと以下のようになる。

【表1】美空ひばりの年間映画出演本数の推移

年	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71
数	7	11	8	8	8	10	13	8	12	15	14	11	12	9	8	1	1	2	0	1	1	2	2

美空ひばりの映画歴を区分する際に、よく引き合いに出されるのは、東映との専属契約である。具体的には時代劇のスター<sup>1</sup>として活躍した、1958年8月から63年12月までを指す。

これに基づき、キネマ旬報編集部（1994）は59年から63年までを「女優 美空ひばり」と区分し、その前後を「天才少女 美空ひばり」「女王 美空ひばり」としている。

山根（1989）も東映専属を重く見て、この時期を「東映時代」としている。しかし、「東映時代」以前に関しては、キネマ旬報編集部よりも細かい区分を提示する。まず、初出演から『リンゴ園の少女』（52年11月）あたりまでを第一期（「幼い少女時代」）、そこから『たけくらべ』

<sup>1</sup> 浦谷（1981）は「東映チャンバラは、片岡千恵蔵・市川右太衛門・大友柳太郎・東千代之介・中村錦之介・大川橋蔵・美空ひばりの七大スターを中心にがっちりとローテーションを組んでいた（139）」と述べている。

(55年8月)までを第二期(「思春期」)、そして『じゃんけん娘』から東映専属になるまでを第三期としている<sup>2</sup>。なお、「東映時代」は第四期で、専属後に関してはとくに言及していない。同様に、白井(1990)も「デビューから子役の松竹・新東宝時代。娘役を多く演じた東宝時代。そして成長した熟女といえるのが東映時代(206)」と、専属契約を重視して「東映時代」を設定している。

これらに対し、板倉(2009)は「ひばりが演じたキャラクターの役柄やプロットの特徴などからひばり映画のフィルモグラフィを便宜的に二つの時代に分類(58)」している。「第一期:『少女』時代 一九四九～五四(『ど自慢狂時代』から『伊豆の踊子』まで)」と「第二期:『娘』時代 一九五四～七一(『唄しぐれ おしどり若衆』から『女の花道』まで)」である。この分類に基づき、板倉は「ひばりの演じる役柄が物語世界で果たす役割や、当時の女性観客に与えていたであろう社会的な機能を考察」する。

考察そのものは美空の普及を考えるうえで示唆に富んでいるが、板倉が取り上げる作品は時代劇に傾いている。また、彼女の映画を「支配的なジェンダー規範を積極的に打ち破ってくれる女性アクション映画」と特徴づけるにあたって捨象した部分も多い。たとえば、『若き日は悲し』『娘船頭さん』『たけくらべ』などでの美空はあまりに無力であるし、『七変化狸御殿』『歌まつり満月狸合戦』『大当り狸御殿』などの一連のオペレッタ映画を、ジェンダー的な切り口のみで考察するには限界がある。結局のところ、同論文はそれを所収する論文集の「問題文脈を浮かび上がらせるに足る作品の系譜にのみ焦点を投じて分析するという方針(四方田2009:18)」に従ったものであり、美空の映画全体を見渡すことを目的としていないのであろう。

以上を勘案して、本研究はキネマ旬報編集部(1994)・山根(1989)・白井(1990)に倣い、東映と専属契約を結んだことに着目する。その前後に関しては、分類の整合性を保つために美空が出演した映画を制作した会社を基準にして時代区分を試みる<sup>3</sup>。

そこで、白井が提示した「松竹・新東宝時代」「東宝時代」「東映時代」を検討してみたい。「東映時代」は妥当として、それ以前の括り方はどうだろうか。

【表2】東映専属前における出演映画会社の推移

	49上	49下	50上	50下	51上	51下	52上	52下	53上	53下	54上	54下	55上	55下	56上	56下	57上	57下	58上
松竹		2	1	3	3	4	3	3	3	4	3	3	1						1
東映	1	2	2								1	1	2	4	1	3	3	3	6
東宝														2	1	1	1	1	1
新東宝	1	1	4															2	
大映						1		1							1		1		
新芸								1			1	1	1	2					
その他				1					1					1					
合計	2	5	7	4	3	5	3	5	4	4	5	5	4	9	3	5	6	6	8

<sup>2</sup> 第一期で「一人の少女がこの間、全国津々浦々、老若男女だれにも愛される人気スター・トップ歌手」になり、第二期で「映画スターとして一段と成長した」姿を見せ、第三期で三人娘 による現代劇と市川右太衛門や長谷川一夫との共演による時代劇に触れながら「映画出演が増えてゆく」というのである(42)。

<sup>3</sup> 板倉も東映時代を「映画俳優としてのひばりの絶頂期でもあった(57)」と一つの時期であったという認識を示している。

この二つの時期がどこで分かたれるのかについて、白井は明確にしていないのだが、表2<sup>4</sup>をみると、そもそも新東宝や東宝を特定の時期を特徴づける要素とするのには限界があることがわかる。とくに東宝のみをもって一つの時期とするのは——おそらくそれは1955年下半年からだと思われるが——数のうえで大きく上回る東映を無視することになる。たとえ『ジャンケン娘』などの東宝作品が印象的であっても<sup>5</sup>、全体の流れから見て、東映との関係に着目してこの時期を捉えるべきであろう。同様に「松竹・新東宝時代」も松竹に焦点を当てたほうが全体の傾向を把握しやすい。たしかに、美空は1950年上半年に新東宝の4作品に出演しているのだが、そのうちの3作品は出演率が二割に満たない(斎藤 2010a)のである。

以上から、本研究では初出演から1955年上半年までを「松竹優勢時代」とし、55年下半年から58年上半年を「東映優勢時代」とする。さらに山根(1989)に従えば、「松竹優勢時代」は「幼い少女時代」と「思春期」に分けることができる。「初期美空映画の特徴について」(斎藤 2010b)で指摘したとおり、初期作品では美空ひばりの役柄や物語の展開にある一定の傾向があるのだが、それは「思春期」においては共有されていないという認識なのだろう。本研究も同じ立場をとり、「松竹優勢時代」は前期と後期に下位分類されるべきと考える。ただし、山根が『リンゴ園の少女』(52年11月)で線を引くのに対し、本研究では「美空ひばりの普及と初期映画の関係」(斎藤 2010a)で示したとおり、美空ひばりが当代一の人気歌手と認知された時点に着目し、1952年上半年(6月)で区切りたい<sup>6</sup>。

これらのことから本稿は「松竹優勢時代後期」として1952年下半年～55年上半年に出演した作品について考察を進めていく。

### 3. 当該期間における美空ひばり——先行研究の概観の代わりに——

管見が及ぶ限り、当該期間における美空ひばりの普及と映画の関係を俯瞰するような研究はない。そこで、ここでは資料や先行研究などから当時の美空の状況を振り返りたい。

【表3】『平凡』誌における人気投票「花形歌手ベストテン選出人気投票」の結果(1952-55)

	1952	票数	1953	票数	1954	票数	1955	票数
1	美空ひばり	127738	美空ひばり	155902	美空ひばり	118665	美空ひばり	137450
2	小畑実	67220	小畑実	104573	小畑実	94367	春日八郎	105947
3	岡晴夫	41917	田端義男	52023	菅原都々子	56691	江利チエミ	33414
4	田端義男	36487	菅原都々子	50970	田端義男	52748	小畑実	33055
5	奈良光枝	22811	津村謙	28135	江利チエミ	20962	田端義男	24736
	総投票数	218726	総投票数	589314	総投票数	557697	総投票数	534439

<sup>4</sup> 東映は1951年に東横と大泉(太泉)が合併した会社だが、合併前の作品も東映として数えている。東宝の欄には宝塚映画——東宝に依存していたため——の作品も含んでいる。「新芸」とは美空所属の「新芸術プロダクション」のことを指す。

<sup>5</sup> なお、『ジャンケン娘』は1957年上半年までの「戦後配収ベスト20」において第19位に位置づけられており、1956年末までに美空が出演した作品のなかでは最大のヒット作である。なお、この記録は『銭形平次捕物控 まだら蛇』(1957年1月封切)によって塗り替えられている(同「戦後配収ベスト20」では15位)。

<sup>6</sup> 『美空ひばり公式完全データブック』では美空の活動を「1937～1952 天才少女」「1953～1968 スター」「1969～1986 女王」「1987～ 不死鳥」としていることから、「松竹優勢時代」を前後期として下位分類する必要があると言えよう。

表3は『平凡』誌上の人気投票「花形歌手ベストテン選出人気投票」<sup>7</sup>の結果（1952-55）であるが、ここに示した数字から導き出されるのは、圧倒的な美空人気が続いている状態である（ランキングは男女別になっているが、表3はそれを男女混合にしたうえで上位5人を示したものである。女性に限定して見てみると、人気の独占状態がさらに明確に推し量られよう）。

東京新聞文化部の伊藤寿二は1955年の結果を評して、「四年続けて本年度も、美空ひばりが男女歌手の中で最高点で、流行歌手の王座が動かないのは驚異である。何しろ女性歌手に投票した総数の半分以上をひばりが独りでさらっているのだからすさまじい<sup>8</sup>（1955：120）」という文章を寄せている。

その「すさまじい」状況、すなわち当時の繁栄ぶりは伝記からもうかがえる。ここでは「古典的著作」（齋藤 2009）と称される四冊（上前淳一郎『イカロスの翼——美空ひばりと日本人の40年』、大下英治『美空ひばり——時代を歌う』、竹中労『美空ひばり』、本田靖春『戦後——美空ひばりとその時代』）を見てみたい。

美空ひばりの隆盛を象徴的に伝えるにあたって、引き合いに出されるべきは、やはり「ひばり御殿」——1953年11月に横浜市磯子区の高級住宅地・間坂に建てた「敷地900坪、建坪106坪、15部屋、プール付きの」住宅<sup>9</sup>——であろう。大下（1992）はこれを経済的な成功という文脈で紹介し、次の説明を加えている。

ひばりの収入は、うなぎのぼりであった。レコードデビューした昭和二十四年の年収こそ六十万円であったが、二十五年は百十万円、二十六年は五百万円、二十七年は、千二百万円であった。二十七年の大学卒の銀行員の初任給が、月六千円である（257）。

美空の成功に対する人々の評価として、「ひばり御殿」が引き合いに出される場合もある。上前（1985）は「誰の心の底にも、八百坪の超豪邸を建てるほど稼いだ少女への驚きがあった」としたうえで、「驚きの現れ方には二つの種類があって、これを肯定的に出すと、すごいな、あやかりたいな、となって観光バスに乗る<sup>10</sup>。半面、驚きを否定的に出すのが嫉妬であって、この場合には、不快だ、けしからんとなって悪口をいい、あざけり笑う（129）」と述べている。

あるいは、竹中（2005）は美空の独白という文体をとりながら、「人気の激流はいきなり私をさらって、音をたててうずまくマスコミの川波に、ほうりだしました。そこには、ゴシップとスキャンダルの水しぶきが立ちこめていました（105）」と述べ、そのゴシップのひとつとして「ひばり御殿」に言及し、「『成り上がり者』の典型のようにいわれてあざ笑われて、どんなにくやしい肩身のせまい思いをしたことでしょうか（106）」としている。

いずれにしても美空ひばりは、この時期において国内では知らない者は存在しないと断じられるほどの、絶対的な知名度を極めたことが伺い知れよう<sup>11</sup>。

<sup>7</sup> 『平凡』誌上の人気投票「花形歌手ベストテン選出人気投票」は1949年に開始された。同人気投票は「オール歌手人気投票ベスト・テン」「人気歌手ベストテン」などと表記されることもある。美空が初めてランクインしたのは1950年で第9位、その翌年に第3位。なお、ランキングは1952年から男女別となっている。

<sup>8</sup> 伊藤は美空人気の理由を映画と並んでヒット曲にも求めているが、映画とヒット曲の関係に関しては稿を改めて検討したい。

<sup>9</sup> ひばりプロダクションは900坪、上前は800坪、大下は「九百坪近い」としている。

<sup>10</sup> 上前は「ひばり御殿」が横浜新名所として観光コースに組み込まれるようになったとしている。

<sup>11</sup> ほかに引き合いに出されるのが、美空が所属していた新芸術プロダクション（新芸プロ）である。同

## 5. 映画の貢献度

美空ひばりの圧倒的な人気と映画はいかなる関係があったのだろうか。

表4④は『映画年鑑』（時事通信社 1954a, 54b, 56）に掲載されている「邦・洋画封切興信録」をもとにして、観客動員数別の封切邦画作品数と、それぞれが占める邦画全体に対する割合を表したものである。⑤は美空ひばり出演作品を同様に整理したものである。⑥における丸数字は美空の出演作品名に該当する（具体的な作品名は表5を参照のこと）<sup>12</sup>。なお、「動員数は浅草興行街代表封切館の週計（浅草で公開されなかった作品は新宿の週計）」である。

【表4】松竹優勢時代後期における映画観客動員数別の作品数と割合

観客動員数（人）	全邦画④		美空出演映画⑤		
	作品数	割合	作品数	割合	作品名（表5を参照）
0～ 4,999	29	3%	0	0%	
5,000～ 9,999	129	16%	1	4%	⑥
10,000～14,999	227	27%	3	12%	②③④⑥
15,000～19,999	178	21%	5	19%	②③⑨⑬⑲⑳
20,000～24,999	129	16%	4	15%	④⑮⑳㉑㉒
25,000～29,999	67	8%	6	23%	⑤⑪⑫⑰⑳㉓㉔
30,000～34,999	40	5%	3	12%	⑬⑯⑲
35,000～	32	4%	4	15%	①⑩⑧⑭
合計	831	100%	26	100%	

表4をみると全体的な観客動員数の傾向に比べて、美空ひばりの作品のほうが多くの動員に成功していることが見てとれるだろう。とくに25,000人以上を動員する作品となると、全体では17%にしかならないのに対し、美空が出演する作品は50%と、彼女の人気の高さとともに普及媒体としての映画の影響力を示している<sup>13</sup>。

## 6. 映画は美空ひばりの何を伝えたのか——歌か？ 演技か？

「美空ひばりの普及と初期映画の関係」（斎藤 2010a）において、松竹優勢時代前期<sup>14</sup>に美空

社は美空のマネージメントをしていた福島通人が1951年5月に発足させた会社だが、この時期に自主制作した美空の映画（『リンゴ園の少女』『ひよどり草紙』）と劇場公演の収益によって、銀座に自社ビルを構えるまでに至った（54年）。同社には美空を求心力として彼女以外にも所属タレントがおり（川田晴久、堺駿二、山茶花究、中村錦之介、田端義夫ら）、上前（1985）は「当時、これほどそうそうたる顔ぶれをそろえてマネージするプロダクションは日本に一つもなかった（136）」、本田（1987）は「他に肩を並べるものがない最大の芸能プロダクションであった（332）」、そして大下（1992）は「業界では、『五社の次には新芸プロよ』と謳われたほどであった（291）」としている。

<sup>12</sup> 『映画年鑑』には『⑦ひばりの歌う玉手箱』に関する記載はない。

<sup>13</sup> 年ごとの映画会社各社の「邦画作品別配収ベストテン」によると、52年の松竹作品第2位として『ひばり姫初夢道中（⑤）』、第8位として『悲しき小鳩（①）』、同年の大映作品第10位として『二人の瞳（③）』、53年の松竹作品第7位として『お嬢さん社長（⑬）』、54年松竹作品第6位として『七変化狸御殿（⑳）』、同年新東宝作品第10位として『歌ごよみ お夏清十郎（㉑）』となっている。彼女の作品のおよそ1/4は年間を通じた「ベストテン」に入るほどの集客力をもっていたことになる。

<sup>14</sup> 同論文においては「初期映画」とした。

が出演した映画は歌本位ではないことを以下のとおり明らかにした。

出演した映画の平均上映時間(㊸)は82分50秒で、彼女の出演時間(㊹)は平均26分54秒である。そのうち画面に映し出された美空が歌っている時間は5分41秒(歌唱時間A=㊺)であり、これに(美空が映らずに)彼女の歌が聞こえてくる時間を加えると7分48秒(歌唱時間B=㊻)になる。以上から、美空の映像が作品中に占める割合(出演率)は32.5%であり、歌唱場面が映画全体に占める割合の平均は6.9%(歌唱率a=㊺÷㊸)、美空の歌が聞こえてくる割合は9.4%(歌唱率b=㊻÷㊸)であることが明らかになった。さらに、出演時間に対する歌唱場面は21.1%(歌唱率c=㊺÷㊹)となる。

表5をみると、松竹優勢時代後期における平均上映時間(㊸)は84分45秒、平均出演時間(㊹)は34分34秒、歌唱時間A(㊺)は7分41秒、歌唱時間B(㊻)は11分02秒であり、出演率は40.8%、歌唱率aは9.1%、歌唱率bは13.0%、歌唱率cは22.3%となっており、前期と同様の傾向を見せている。また、⑦と⑭は美空が出演した作品から歌唱場面だけを編集したものなのだが、この二作品を除くと、出演率は40.0%、歌唱率aは7.7%、歌唱率bは11.5%、歌唱率cは19.2%となり、松竹優勢時代の前期・後期の差はさらに縮まる。

【表5】「松竹優勢時代後期」における美空ひばりの出演時間／歌唱時間／出演率／歌唱率<sup>15</sup>

	上映時間 ㊸	出演時間 ㊹	歌唱時間 A ㊺	歌唱時間 B ㊻	出演率 ㊹÷㊸	歌唱率a ㊺÷㊸	歌唱率b ㊻÷㊸	歌唱率c ㊺÷㊹
①ひばりのサーカス 悲しき小鳩	91'24"	41'37"	10'36"	16'09"	45.7%	11.6%	17.7%	25.5%
②牛若丸	115'51"	61'19"	6'28"	9'08"	52.9%	5.6%	7.9%	10.5%
③二人の瞳	80'50"	28'49"	6'40"	10'35"	35.6%	8.2%	13.1%	23.1%
④リンゴ園の少女	92'40"	36'12"	6'37"	13'11"	39.1%	7.1%	14.2%	18.3%
⑤ひばり 姫初夢道中	92'04"	32'38"	11'48"	17'39"	35.4%	12.8%	19.2%	36.2%
⑥三太頑張れッ!	—	—	—	—	—	—	—	—
⑦ひばりの歌う玉手箱	19'26"	16'00"	16'00"	19'05"	82.3%	82.3%	98.2%	100.0%
⑧姉妹	99'36"	39'34"	8'49"	11'30"	39.7%	8.9%	11.5%	22.3%
⑨ひばりの陽気な天使	43'35"	32'41"	19'12"	23'05"	75.0%	44.1%	53.0%	58.7%
⑩ひばり 捕物帳 唄祭り八百八町	82'47"	29'55"	5'18"	7'54"	36.1%	6.4%	9.5%	17.7%
⑪ひばりの悲しき瞳	94'49"	43'33"	4'38"	8'21"	45.9%	4.9%	8.8%	10.6%
⑫山を守る兄弟	86'58"	19'30"	3'03"	4'43"	22.4%	3.5%	5.4%	15.6%
⑬お嬢さん社長	93'25"	51'35"	9'16"	13'48"	55.2%	9.9%	14.8%	18.0%
⑭美空ひばりの春は唄から	17'18"	15'16"	15'16"	17'04"	88.2%	88.2%	98.7%	100.0%

<sup>15</sup> 歌唱時間Aとは、美空ひばりが画面上に確認でき、かつ彼女の歌が聞こえてくる時間をさす。なお、歌唱時間には前奏や他者による掛け声などの時間も含んでいる。また、鼻歌や寝言での歌、さらには踊りのみの場合も「歌」としてみなしている。歌唱時間Bは、歌唱時間Aに美空の歌が彼女の映像を伴わずに聞こえてきた時間を加えたものであるが、クレジット・タイトルの背景音楽として美空の歌が流れている場合もこれに含んでいる。割合はすべて小数点以下第二位を四捨五入したもの。なお、DVD/VHSビデオにおける時間を計測しているため、作品の一部がカットされてDVD/VHSビデオ化されている場合には、カット分はデータに反映されていない(また、⑥⑰⑱は未見のためデータはない)。

⑮ひよどり草紙	90'01"	29'52"	1'45"	5'19"	33.1%	1.9%	5.9%	5.9%
⑯伊豆の踊子	97' 50"	38'04"	5'40"	8'09"	38.9%	5.8%	8.3%	14.9%
⑰唄しぐれ おしどり若衆	—	—	—	—	—	—	—	—
⑱青春ロマンスシート 青草に坐す	101' 52"	43'37"	5'40"	7'07"	42.8%	5.6%	7.0%	13.0%
⑲びっくり五十三次	95'44"	36'20"	4'00"	7'10"	38.0%	4.2%	7.5%	11.0%
⑳八百屋お七 ふり袖月夜	—	—	—	—	—	—	—	—
㉑若き日は悲し	97'03"	45'15"	5'26"	7'07"	46.6%	5.6%	7.3%	12.0%
㉒歌ごよみ お夏清十郎	87'52"	32'29"	2'51"	5'28"	37.0%	3.2%	6.2%	8.8%
㉓七変化狸御殿	99'19"	48'17"	12'05"	16'39"	48.6%	12.1%	16.8%	25.0%
㉔大江戸千両囃子	84'24"	19'24"	6'11"	13'03"	23.0%	7.3%	15.5%	31.9%
㉕娘船頭さん	85'18"	45'16"	5'45"	8'03"	53.1%	6.7%	9.4%	12.7%
㉖青春航路 海の若人	93'11"	10'45"	40"	46"	11.5%	0.7%	0.8%	6.2%
㉗歌まつり満月狸合戦	90'45"	31'40"	10'52"	13'56"	34.9%	12.0%	15.4%	34.3%
平均	84'45"	34'34"	7'41"	11'02"	40.8%	9.1%	13.0%	22.3%

しかしながら、前期の数字には歌うことのみを課された、いわばゲスト出演した作品<sup>16</sup>は未見のため含まれていない。前期では出演率が2割に満たない作品が30本中12本もあるのに対し、後期では27本中2本しかないことから推し量られるように、実際には演技の比重は増しているとみるのが妥当であろう。

質的側面においても、これと同様の傾向——映画に映し出された美空ひばりは歌うことに特化した存在ではなく、しかも演技の比重は増している——にあると言える。

一部では美空を「映画女優」として評するようにもなっている。たとえば『近代映画』誌ではグラビア紙面一頁に写真を掲載し「天才少女歌手としてスタートを切り、今ではすっかり映画女優という名にふさわしい女らしさを身につけているひばりさんといってよいでしょう(1954: 11)」というキャプションを付している。さらに同誌では「流行歌手として圧倒的な人気を集め、映画入りしてからも、益々その人気は上昇する一方という美空ひばりちゃん、(中略)野村監督の『伊豆の踊子』を境にして、本格的な映画スターになったと、世間の衆目をあつめている(1955: 98)」という記事もある。

だが、一方では『キネマ旬報』のように「『伊豆の踊子』は美空ひばりにとって、初めての映画らしい役どころだった。(中略)期待されたが、いつもの彼女と少しも変わらず、何のことはない踊り子だったのには失望した。そうして、相変らず、正月映画のスターとして(中略)ただの見世物になっている(1955: 71)」といった否定的な見方もある。

そうは言うものの、『キネマ旬報』が美空ひばりを否定することで統一されているわけではない。たとえば、荻昌弘は同誌の『リンゴ園の少女』評で「ひばりはそういうゴタゴタ<sup>17</sup>をいかにも彼女の年頃らしく或いはコミックに、或いは感傷的にさばききだけの達者さを充分もっていた(1953: 60)」、品田雄吉は『唄祭り八百八町』評で「美空ひばりが心得た風の芝居

<sup>16</sup> 『のど自慢狂時代』『ホームラン狂時代』『エノケンの底抜け大放送』『戦後派親爺』『黄金バット 摩天楼の怪人』など。

<sup>17</sup> 「そういうゴタゴタ」とは作品の本筋から離れたエピソード(「商売仇の選挙運動のカラクリとかリンゴ品評会の争いとか」)を指す。

をせず、おとなしく抑えているのは賢明である（1953：59）」と述べ、好意的な評価を与えている。

このような評価の相違は同一の評者にもみられる。たとえば登川直樹は『ひばり姫初夢道中』での美空を「日頃の達者さだけで趣向の新しさはない。ただ妙にませた嫌みのないのが取り柄である（1953：98）」とする一方で、『娘船頭さん』では「美空ひばりは（中略）大人びた物腰で女優らしく演技するようになったのが見ものである（1955：96）」としている<sup>18</sup>。

評価はまちまちであるが、いずれの場合においても、美空ひばりの演技は批評するに値するという認識が共通してあることが見てとれよう。

それでは、美空はどのような役柄を演じ、どのように受容されたのであろうか。本稿に続く「美空映画（1952.7 - 1955.6）の特徴」で見てみたい。

## 参考文献

- 板倉史明 2009 「視線と眩暈——美空ひばりの異性装時代劇」四方田犬彦、鷺谷花編『戦う女たち 日本映画の女性アクション』東京：作品社：56-83。
- 伊藤寿二 1955 「大衆の支持するもの」『平凡』昭和30年3月号：120-121。
- 上前淳一郎 1985 『イカロスの翼——美空ひばりと日本人の40年』東京：文藝春秋。
- 浦谷年良 1981 『ちゃんばらグラフィティー』東京：講談社。
- 荻昌弘 1953 「リンゴ園の少女（日本映画批評）」『キネマ旬報』870号（通巻）：59-60。
- 大下英治 1992 『美空ひばり——時代を歌う』東京：新潮社（新潮文庫）。
- 加藤和也（ひばりプロダクション） 2011 『美空ひばり公式完全データブック』東京：角川書店。
- キネマ旬報編集部編 1994 『美空ひばり映画コレクション』東京：キネマ旬報社。
- 齋藤慎爾 2009 『ひばり伝 蒼穹流謫』東京：講談社。
- 齋藤完 2010a 「美空ひばりの普及と初期映画の関係」『山口大学教育学部 研究論叢 芸術・体育・教育・心理』第60号：115-126。
- 齋藤完 2010b 「初期美空映画の特徴について：役柄とパターンに関する一考察」『山口大学教育学部 研究論叢 芸術・体育・教育・心理』第60号：127-139。
- 滋野辰彦 1952 「牛若丸（日本映画批評）」『キネマ旬報』865号（通巻）：62。
- 滋野辰彦 1954a 「おしどり若衆（日本映画批評）」『キネマ旬報』909号（通巻）：60。
- 滋野辰彦 1954b 「青草に坐す（日本映画批評）」『キネマ旬報』911号（通巻）：53。
- 品田雄吉 1953 「唄祭り八百八町（日本映画批評）」『キネマ旬報』887号（通巻）：59。
- 時事通信社 1954a 『映画年鑑 1954』東京：時事通信。
- 時事通信社 1954b 『映画年鑑 1955』東京：時事通信。
- 時事通信社 1956 『映画年鑑 1956』東京：時事通信。
- 白井佳夫 1990 「一貫して庶民を演じつづけたひばりの銀幕人生」文藝春秋編『美空ひばり “歌う女王” のすべて』東京：文藝春秋、204-211。
- 竹中労 2005 『完本 美空ひばり』東京：筑摩書房（ちくま文庫）。

<sup>18</sup> あるいは滋野辰彦である。『牛若丸』では「演技にかなりの素質があることは認められる（1952:62）」、『おしぐれ おしどり若衆』では「美空ひばりはネーム・ヴァリエウだけで、他の女優を起用していたら、もっと配役の内容は充実しただろう（1954a:60）」、『青春ロマンスシート 青草に坐す』では「美空ひばりはだいたい演技が上手になった。しかし一通りの演技ができるようになった美空には、別に、何の魅力もないという皮肉な結果になる（1954b:53）」としている。



- 登川直樹 1953 「ひばり姫初夢道中 (日本映画批評)」『キネマ旬報』871号 (通巻) : 98。  
登川直樹 1955 「娘船頭さん (日本映画批評)」『キネマ旬報』937号 (通巻) : 96。  
本田靖春 1987 『「戦後」——美空ひばりとその時代』東京 : 講談社。  
山根貞男 1989 「大衆娯楽映画の栄光を謳い上げた女優『ひばり』」『アサヒグラフ 美空ひばり 緊急大特集追悼アルバム』東京 : 朝日新聞社 : 41-45。  
四方田犬彦 2009 「女の戦いはなぜ悲しいのか」四方田犬彦、鷺谷花編『戦う女たち 日本映画の女性アクション』東京 : 作品社 : 5-19。  
著者不詳 1952 「花形歌手人気投票発表」『平凡』昭和27年3月号 : 42-43。  
著者不詳 1953 「1953年度の20大人気歌手！」『平凡』昭和28年3月号 : 58-59。  
著者不詳 1954 「1954年度の男女ベストテン人気歌手」『平凡』昭和29年3月号 : 102-105。  
著者不詳 1954 「美空ひばり」『近代映画』108号 (通号) : 11。  
著者不詳 1955 「1955年の花形歌手 ベストテン決定！」『平凡』昭和30年3月号 : 38。  
著者不詳 1955 「映画人クロースアップ」『キネマ旬報』925号 (通巻) : 74。  
著者不詳 1955 「こんな映画が撮影される」『近代映画』119号 (通号) : 98。

#### 参考資料 (プレスシート)

『三太頑張れっ!』『唄しぐれ おしどり若衆』『八百屋お七 ふり袖月夜』

#### 参考WEBサイト

『美空ひばり公式ウェブサイト』 (<http://www.misorahibari.com/>)。2011年7月15日13時55分受信。